

Birds Note (バース・ノート) 野生の不思議を追いかけて

山岸 哲 (著) 269 頁
2012 年 2 月 信濃毎日新聞社
1,400 円 + 税
ISBN: 978-4-7840-7184-5

本書は、「ユーモアに溢れた珠玉のエッセイ」と帯にあるように、平易な文章で鳥の生態を楽しく読ませてくれる本である。しかし、それだけではない。著者は日本鳥学会の元会長であり、自らの研究や若手研究者の育成、さらには学会の運営改革によって学界をリードしてきた人物である。エッセイという形で表れた著者の本音は、プロの研究者や大学院生を含めた読者に対して、科学や研究活動のあり方、そして自らの姿勢を考えさせるだけのものがある。

本書は様々な媒体に掲載されたエッセイ等約 60 編を再録したものである。ただし、その多くは初出が地方紙など読者の限られたものであるため、ほとんどの文章は多くの人にとって初めて読むものだろう。内容は対談・コラムを除くと、三つの部分（ノート 1~3）に分けられている。ノート 1「よみがえれ野生のいのち - 絶滅と復活をめぐる」では、著者が関わってきたアホウドリ、トキ、コウノトリをはじめ各種鳥類の保護・野生復帰事業について、絶滅に（瀕するに）至った生物学的説明とともに、行政や住民の取り組みや問題の見方をも語っている。

ノート 2「したたかな野生のいのち - 行動生態学の見方から」では、いろいろな鳥の生態が紹介され、その適応的意義が説明されている。「未婚の雄がいるのに、なぜ雌は既婚の雄を選び一夫一妻が成立するのか」「イヌワシは 1 羽しか雛が育たないのになぜ 2 卵産むのか」という話題については、他書で読んだことがある人も多いだろう。しかし、関連する研究を把握し、深い洞察を加えた著者の解釈はユニークなものもあり、説得力がある。性比調節、協同繁殖、つがい外交尾、子殺しについてのエッセイもわかりやすく簡潔なレビューとさえ言える。

私にとって痛快だったのは、著者が行動生態学の視点に懐疑の目をも向けていたことである。行動生態学では、今日見られる動物の行動は子を多く残す上で有利であるから（適応度が高いから）進化したと考える。この見方によって動物行動の理解が進んだわけだが、一つの色眼鏡であること

には違いない。著者は、モズの鳴き真似は楽しみや遊びの可能性もあると考え、鳴き真似に適応的意義を見出そうとする説明に対し「動物の行動は万事こうした理詰めで行われているものなのだろうか」と疑問を呈している。近年、行動の系統的・生理的な制約の理解が始まり、行動シンドロームといった研究分野も盛んになっている。著者の疑問は、時代に先んじたものであったと言えるだろう。それにしても、日本に行動生態学を輸入し、この分野を牽引してきた張本人が、自分の書いたものに対して「『適応度』という用語をよくもこんなに使ったものだ和我ながらあきれ返る」というのだから、冷静というか、曲者である。

ノート 3「野生のいのちいつまでも」には、「これからの研究の姿」という気になるサブタイトルがついている。この部分の重要なメッセージは「自分の興味を出発点としてオリジナリティーの高い研究をしよう」というものだろう。「好事と科学」という文章では、実際に著者がそれを実現した過程、つまり中学校教員時代に単に「好き」で初めたホオジロの観察が興味深い行動の発見、そしてその意義の解明に発展し「科学」となっていく過程を語っている。これに続く「おもしろい研究に期待」という文章では、あるべき研究（者）の姿をより明解に述べている。「研究者の命は課題を見つけること」であり、よい課題を見つけるためには「余計なもの」を含めて自然をよく見ることが必要だと著者は言う。

今日の研究者をとりまく状況では、激しい競争にさらされる若手や評価に追われるプロ研究者は、すでに他人によって提示されている課題を解いて論文を書くこともあるだろう。効率よく科学的探究の経験を積まなくてはならない大学院生は、よい課題を与えてもらいそれを解く訓練をした方がよいかも知れない。しかし、研究の醍醐味は自分で興味深い行動・生態等を発見し、その意義やメカニズムを解明することだ。本当に新しくおもしろい課題は、好きで見続けている中でふと気づくものではないか。「これからの研究の姿」は単に著者の予想や希望ではなく、「もっとおもしろい研究をやらなくてはだめだ」という今の研究のあり方に対する批判を含んでいる。

本書はエッセイの再録とあなどれない、著者の見識と曲者ぶりが発揮された一冊である。

濱尾章二
(国立科学博物館)